１．はじめに

　同時期につくられ、崩壊したヴァイマール共和国とバウハウスには、密接な関係があるように思う。混乱の時代のバウハウスはどのような社会を目指し、またその社会は実現されたのか。ヴァイマール共和国の歴史を追いながら、バウハウスが社会に与えた影響を考えていく。

２．バウハウスの理念

●グロピウス宣言
　a)近代において分化してしまった諸芸術（絵画・彫刻・建築・工芸）を、再び建築の元に統一して大建築を建てる。
b)“諸芸術の統一”はそれらの基盤である手仕事に立ち返ることによってのみ可能→手工芸家の同業組合、その養成の場（工房）を作る。

●工房教育
芸術は教えられないゆえに、手工技術の訓練に徹する。親方がもっぱら、徒弟の訓練にあたった。

●彫刻、絵画、工芸を建築の元に統合
建築家は、科学技術者であると同時に、人文・社会・自然科学の全領域にわたって熟知しなければならない。

●労働共同体の概念
建築は、一人の手では作れない　（専門技術者などの協力が必要）
民族の生活経済の基盤に、共同作業として成立

すべての造形の領域を建築の下に統一する
＝一元的世界像、統一的世界の理念

「ある時代の世界感情はその時代の建築作品において明瞭に結晶化する」

民族芸術⇒　それまでのアカデミー教育による「サロン芸術」を批判

安価で良質な住宅の供給　→　住宅建築のパーツを規格化、組み立ての可変性の遂行
　⇒　建築家の社会的使命という考え

何故グロピウスはドイツ全体の統一を試みたのか。
→　当時のドイツの危機的状況
インフレ、ナショナリズムの台頭

３．ヴァイマール共和国

1918 年に成立。ヴァイマール憲法は人民主権・男女２０歳以上の普通選挙・議院内閣制・世界ではじめて社会権を認め、当時の世界で最も民主的な憲法といわれた。

＜初期 1918～1923/1924 年＞
苛酷なヴェルサイユ条約の押し付け、賠償取立て、破局的なインフレーションの進行などにより政治・経済は混乱し、左右両翼からのクーデタや革命の試み、政府要人の暗殺などが相次ぐ。

＜安定期 1924～1929 年＞
大量の外貨が流入し、経済は復興に向かう。西方諸国との協調外交が展開される。この時期には左右の過激な勢力も影をひそめるが、1925 年の大統領選挙で保守派のヒンデンブルクが当選したことは、共和派の弱さを示す。
＜崩壊期 1929～1933 年＞
1929 年の世界恐慌の勃発を契機に共和国が崩壊へ向かう。ドイツ経済の不況は急速に深刻化し、1932 年ごろには 600 万以上の失業者を生み出すに至る。ナチス勢力の拡大。

ヴァイマール共和国を短命に終わらせた要因：
国際環境の厳しさ・ワイマール憲法の欠陥・恐慌時の経済政策の失敗・大企業や大土地所有者の圧力・中間層の困窮と不安・完了や国防軍の反共和制的姿勢など。国民の政党への信頼は揺らぎ、奇跡の独裁者登場を待望する、一種の疑似宗教的心理がみなぎっていた。→ヒトラーの登場

科学分野・文化の発展

４．ヴァイマール共和国とバウハウスの終焉

1933 年　ヴァイマール共和国崩壊、バウハウス閉校

ヴァイマール	⇔	第三帝国
・ 進歩的政治勢力		・保守的政治勢力
・ 社会民主主義		・民族社会主義

バウハウス→進歩勢力
この対立を克服した調和のある社会を！！
→急速な変化への不安が、中間層を保守派へ。

強引な進め方に一般のドイツ国民は戸惑う
→大多数はナチスの民族イデオロギーに、社会的アイデンティティを見出す。

５．考察

結果的にはバウハウスは、その理念である一元的世界像を実現させることはできなかったが、国民を動かす絶大な力を持っていたことは確かだったことが当時の社会背景からわかるだろう。しかしそれは芸術だからこそ、その力を持ちえたのだろうか。混乱した無秩序の時代に信じるものが何かわからなくなってしまった人々はグロピウスの指揮能力やバウハウス校舎の目新しさに、絶対的な力を信じたくなったのではないか。今の時代において何かひとつのものが絶対的な力を持つことは無い。バウハウスの力は当時の時代背景にあったからこそうまく力を発揮できたのであって、現代にあったとしてもそれほどの力が信仰されるとは考えにくい。モノが氾濫しているこの時代においてはバウハウスのような理念が存在していても、ひとつのモードとしてとらえられてしまうのではないだろうか。

＜参考文献＞

『近代ドイツ史２』　ゴーロマン　みすず書房
『バウハウスとその周辺Ｉ』　利光功、宮島久雄、貞包博幸　中央公論美術出版
『バウハウス　その建築造形理念』　杉本俊多　鹿島出版会